

舟入高校生徒の皆さんへ

「〇〇〇は、生まれたときから、生は容易であり、あり余るほど豊かで、なんら悲劇的な限界を持っていないという根本的な印象を抱いている。したがって平均的な各個人は、自分のうちに支配と勝利の実感を持っている。第二に、この支配と勝利の実感が彼にあるがままの自分を肯定させ、彼の道徳的、知的財産はりっぱで完璧なものだと考えさせる。この自己満足の結果として、彼は外部からのいっさいの働きかけに対して自己を閉ざし、他人の言葉に耳を傾けず、自分の意見を疑ってみることもなく、他人の存在を考慮しなくなる。心の底にある支配感情がたえず彼を刺激し、彼に支配力を行使するように仕向ける。だから、彼は、この世には彼と彼の同類しかいないかのように振舞うことになる。したがって、第三に、彼はあらゆることに介入し、なんらの配慮も内省も手続きも遠慮もなしに、つまり「直接行動」の方式に従って、自分の低俗な意見を押しつけることになる。」

こう指摘したのは、スペインの思想家オルテガだ。20世紀の初めの「大衆の反逆」という著書の中からの抜粋である。〇〇〇には「大衆人」が入る。オルテガが当時「大衆」と名づけた人々だが、大衆人という呼び名は別にして、私自身の危うさを容赦なく指摘されているようで、でも、そうなりたくなくて、しかし、そうではないと断言する自信もなく、もう何十年も頭から離れていない。

一世紀近くも前の書物だが、ヨーロッパではファシズムが台頭しはじめた時代のものだ。思想家は時代の空気を誰よりも早く察知する「炭鉱のカナリヤ」である。ドイツではナチスが台頭し、スペインでは内線が勃発する。いずれも、「大衆の支持」を得ていた。そして、どうなったか、皆さんもご存じの通りです。「アウシュビッツ」「ゲルニカ」「オラドゥール」……。

私だけではない、人は危うさを持っている。卒業式の式辞で「確信がありすぎるもの」を疑えと申し上げた。その感情の代表が「憎しみ」であり、その態度は「開き直り」、連鎖反応は容易に起きる。「疑い」や「迷い」は相対化し、正しく見るよう誘う。それには、勇気が要る。「努力」するのに勇気が要るのは「疑念」と同居しているからだ。私は、「疑念」をどこかに抱えているうちはまともだと思っている。むしろ、次第に「思うようになった」というのが正確だ。

人は放っておくと妄信したがる。取えて疑う懐の準備をしておこう。違いを尊重し、面白いものを発見できるのは、君に「驚き」や「疑い」の居場所の用意があるからだ。

すべての学問は驚異することによって始まった(アリストテレス)

驚く準備はできているか。こういって失礼だが、今のところ、君たちは、未だ、知らないことが多すぎる。その代わり、驚くことができる。驚くことは、若さの象徴だ。だから、平素から学習して驚け。挑戦と失敗を繰り返しながら、飛び立て。そして、その力を人のために使え。

広島市立舟入高等学校

校長 日浦 毅